



Title	中江藤樹の「致良知」について
Author(s)	田中, 佩刀
Citation	明治大学教養論集, 118: 59-76
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/8811">http://hdl.handle.net/10291/8811</a>
Rights	
Issue Date	1978-03-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

## 中江藤樹の「致良知」について

田 中 佩 刀

### 一

正徳二年（一七一二）壬辰に三輪執斎（名は希賢）が、王陽明の『伝習録』に頭註を附して『標注伝習録』（上・中・下・附録の計四冊）を刊行している。執斎が四十四歳の年にまとめたものであるから、学問の面で脂が乗った時期である。その『標注伝習録』上の二十八丁表には、「問上達工夫」の章に続いて、「問惟精惟一是如何用功」の章が掲げられている。頭註にも別に何とも書いていないが、右の両章の間には実は、諸種の中国の刊本の『伝習録』では、

持志如心痛。一心在痛上、豈有工夫説閒話、管閑事。

という短い章が入っているのである。明治書院の新釈漢文大系の近藤康信氏の『伝習録』の上巻第二十五章（すなわち右の持志如心痛の章）の「余説」には、「本条は三輪執斎本には脱している。」と書かれている。

ところが、上巻のその後の章で、「問、延平云当理而無私心」の章と、「侃問、專涵養而不務講求」の章との間には、次の章が入っている。すなわち、

侃問、持志如心痛、一心在痛上、安有工夫說閑話、管閑事。先生曰、初学工夫、如此用亦好、但要使知出入無時、莫知其郷、心之神明、原是如此、工夫方有着落、若只死死守着、恐於工夫上又發病。

とある。侃は薛尚謙であるが、この章（上巻第九十六章）は薛尚謙の記録とされ、その問は、豈が安に、閒が閑に替っているだけで、全く第二十五章に同じである。そして、この章の「侃の問」が第二十五章と同じであることは、三輪執斎も近藤康信氏も指摘していない。また明德出版社の『陽明学大系』第二巻および別巻（共に第二十五章は削除している）の註にもその点の指摘はしていないのである。そして日本で刊行された『伝習録』では、近藤康信氏のもの以外に、第二十五章を収録しているものは、私の調べた範囲では見当たらない。つまり三輪執斎本に準拠しているためであろう。

しかし、第二十五章「持志如心痛、云々」は、後の同文の章すなわち第九十六章を参照すると、薛尚謙（侃）の言葉であって、王陽明の言葉ではない。にも拘らず「侃問」の二字が落ちて、あたかも王陽明の言葉の如くに記録されているのである。

原典に忠実であるならば、中国の古い刊本の通りに第二十五章「持志如心痛、云々」はそのまま収録すべきである。推測ではあるが、三輪執斎は恐らく右が王陽明の言葉ではないという理由から、右の第二十五章を削除したのだと思う。すなわち、此の脱落の一件は、執斎が自からの意志で「削除」したものであって、執斎の手落ちによる「脱落」ではないと考えられるのである。

以上述べて来たことは、本稿の表題の内容とは関係が無く、単なる「前置き」である。いま私が言いたいのは、江戸時代の儒学者たちの著書や編著の中に見出される「手落ち」が、実は手落ちではなく、その学者の「学説」であったり「解釈」であったりすることが多い、ということである。そういう例の一つとして右に述べた例を引いて見たのである。

本稿の論を進める上で、もう一つ強調して置きたいことが有る。それは江戸時代の漢学（儒学）および漢学者（儒学者）

たちにとって、「訓読」は即ち「学説」であった、ということである。江戸時代に行われていた道春点・闇齋点・後藤点・一齋点などというものは、単に読み方に相違が有ることだけではない。原典に対する解釈、つまりそれぞれの学者の学問的見解から導き出された「訓読」に外ならないのである。従って私たちは江戸時代の漢学者たちの施した訓点を注意深く読むことによって、漢学者たちの学説を辿り得ることができるのである。

## 二

かつて、佐藤一齋の『大学一家私言』に関して、「大学考」（明大和泉校舎研究室紀要第二二号、昭和三十八年三月）という論稿をまとめた際に、致知の解釈に関して『歴史学研究』第七号二頁所収の尾藤正英氏の論文「中江藤樹の思想と陽明学」の一部分を引用させて頂いた。いま右の雑誌が筆者の転居のためすぐ見つからないので、拙稿に引用したものを次に写して引用したい。

藤樹は陽明にならって「致知」を解し、「致ハ至也、知ハ良知ナリ。」とする。（中略）たしかに陽明も、「致とは至也」と解したが、これにつづけて「喪に哀を致すと云ふの致の如し」と説明し、また「其の極を致す」等といいかえている。従って、この「致」は、十分に極度まで到達させる、という意味の語で、「いたす」と訓読さるべきものである。藤樹がこれを「いたる」と読んだのは、誤解といわねばならない。

——『歴史学研究』第七号より——

当時、筆者は尾藤氏の見解は正しいと考え、中江藤樹の訓読は誤っていたかも知れないが、それが藤樹の学問であったのだ、とした。

その後、藤樹の諸著に目を通す中に、筆者の考え方は変わって来た。

すなわち、『季刊東亜』通巻第一一七号（霞山会、昭和四十七年六月）所収の拙稿「日本儒教と中国儒教の再検討」に於て、『大学問』の「喪ニハ哀ヲ致ス」は悲しみの極致に至ることであり、また『大学問』に「之ニ至ルハ、致スナリ。」とあるように、イタルとイタスとは同じに用いられており、且つ「其ノ知識ヲ充広スルノ謂ヒノ若キニ非ザルナリ。」ともあるので、筆者は中江藤樹は、ふつうイタス（到達させる）を、意識的にイタル（到達する）と読んだのだとした。また、傍証として、中江藤樹の晩年の著述である『中庸解』（和文）の中でも、「致中和」を「中和ニ至ル」と読んでいることを引いて置いた。

その後、『伝統と現代』第二二号（昭和四十八年七月）所収の拙稿「近世の陽明学思想」に於ては、『藤樹先生書翰雑著』（写本、正徳三年）の三宅石庵の端書に、中江藤樹が致知も知至も、すべて「知にいたる」と読んでいる、と指摘したことを用いて置いた。

筆者としては、中江藤樹の致良知の訓読に就いてはこれで納得したつもりでいたが、先年、偶々尾藤正英氏の次のような発言を、『世界の名著』続篇第四巻「朱子・王陽明」（昭和四十九年六月）附録の座談会記録の中に発見した。すなわち、（前略）ただし、初期の中江藤樹などは、陽明学を本当に理解していたかどうか疑わしい点があります。藤樹の書いたものの中には「知行合一」が全く出てこない。「致良知」も読み違えていて、「良知を致す」としないで、「良知に致す」と読んでいる。

という尾藤氏の発言である。

昭和十五年四月に刊行された岩波書店の『藤樹先生全集』第二冊の「中庸統解」の解題で加藤盛一氏が既に述べている如く、藤樹の述作の中に陽明知行合一の説が見えないという指摘は今までも有った。

しかし、藤樹の述作の中に「知行合一」が全く出てこない、という尾藤氏の発言は必ずしも正確ではなく、加藤氏の解題

にも有るが、「中庸統解」の中に知行合一や知行並進という語は見えるのである。

「知行合一」の問題は本稿では触れないことにするが、藤樹の「良知に致る」という読み方について、筆者は尾藤氏のよう  
に藤樹が読み違えたものとは考えない。また此の点については先述の如く、三宅石庵が「書藤樹先生書簡雜著端」の中で、

(前略) 王子の書を玩て精く其の文義を解する者は、恐らくは又是に因て、遂に先生を視て王先生の學術を知らザル者  
と為ることあらん。余は思はく是知る也。先生の先生たる所に在りと。(下略)

〈附記〉本稿中の引用文のルビは、特記しない限り、筆者が施したものである。

と述べているが、この石庵の見解を支持したいと考えるのである。以下、藤樹の致良知の解釈について検討して見たいと思  
う。

### 三

そこで中江藤樹の「致良知」に関して、「致」の用法の、例を挙げて見ようと思う。それ等の例は、『藤樹先生全集』全五  
冊(藤樹書院編纂、昭和十五年、岩波書店)から採ることにする。

全集第一冊所収の『文集一、経解』は執筆年代不明である。句読訓点<sup>くごん</sup>が施されているが、原著の体裁をそのまま伝えてい  
るものかどうか解題並凡例を見てもはっきりしない。ただ、凡例の岡田氏一本(岡田季誠氏所蔵の一本であろう)の註  
に「本巻の部分諸処に訓点あり」と記されており、この訓点<sup>くごん</sup>が誰が施したものであるかは分らないが、編纂者がその訓点を  
参照していることは想像に難く無い。いま、一応その訓点に従って書き下し文に改めて次に掲げる。(点線は省略部分。括  
弧「」は標題である。)

「格物致知」……致ハ至ルナリ。命ニ至ルノ至ルト義ヲ同ジウス。此ニ至ツテ而シテ違ハザルノ意ナリ。……孟子ニ謂

ハユル良知是レナリ。吾人ノ身心、此ニ至ッテ而シテ違ハズ。苟ニ日ニ新ニ、日日ニ新ニ、又日ニ新ニス。此レヲ之レ知ニ致ルト謂フ。知ニ致ルハ物ヲ格スニ在リ。……知ニ致ルノ外、物ヲ格ストイフコト無ク、物ヲ格スノ外、知ニ致ルコト無シ。……

「格物致知」……致ハ至ルナリ。五事良知ヲ離レザルヲ之レ致知ト謂フ。致知ノ功ハ格物ニ在リ。格物ノ主宰ハ、良知是レナリ。……

(筆者註——五事は貌・言・視・聴・思を指す。)

「明明徳」……是ノ故ニ学問ノ道ハ、他無シ。知ニ致ルノミ。而シテ知ニ致ルノ工程ハ、物ヲ格スニ在リ。……

「良背敵愾」……中庸ニ謂ハユル中和ニ致リ、天地位シ、萬物育スル、是レナリ。……

「致中和」……則チ当下ニ中和ニ致ル。……

(以上「経解」より)

次に全集第一冊所収『附点孝弟論』より例を引く。解題並凡例によれば、明の顔茂猷の『迪吉録』の一篇である「孝弟論」に藤樹が訓点を施したものであるという。

「不孝不弟論」……遂ニ日ニ遠リ日ニ疎コトヲ致ス……

なお、藤樹が訓点を施した時期については不詳である。

次に全集第一冊所収『文集三、文』に入っている「藤樹規」の中に、藤樹の施した訓点による

……学・問・思・弁ノ四ノ者ハ、以テ知ヲ致ムル所ナリ。……

という所が有る。この藤樹規は藤樹が三十二歳の寛永十六年己卯（一六三九）に作ったものであるといわれる。

また全集第一冊所収『文集四、書』に入っている「原謹以邇言餓熊沢子之行」という書簡は寛永十九年壬午の作である

が、その中に

……物ニ格リ知ヲ致シ、教学相長シ、以テ与ニ中和ヲ致シ、天地位シ、万物育センノミ。……

とある。この訓点は誰が施したものか不詳であるが、原本に記載された訓点を写したものであるらしい。

そして同じく『文集四、書』所収の、「送佃子」と題する正保元年甲申（一六四四）の作の中には、

……真志既ニ立ツトキハ、則チ物ヲ格シ知ニ致ル。知ニ致ツテ聖賢希フベシ。……

とある。正保四年丁亥（一六四七）の（書土橋子巻）には、

……君子ハ唯其ノ良知ニ致ルノミ。……

とあり「書土橋子巻、又」には

……是ヲ以テ其ノ良知ニ致レバ、則チ正命斯ニ立ツ。……

とある。

ただ書簡の訓点は、『藤樹先生全集』の写真版を参照すると、訓点を施した書簡も有れば訓点を施していない書簡もあり、その訓点も藤樹の施したものがどうか判然としない。（その点でこの全集の編纂方針には満足できないところがある）。

従って、右に引例した書簡の訓読を、そのまま藤樹の訓読として受け取ることには聊か躊躇させられるものがある。なお、

『藤樹先生全集』第五冊所収の「藤樹先生年譜」に拠れば、正保元年甲申、藤樹三十七歳の年に始めて陽明全集（または陽明全書）を求め得たとしているのであるが、右の引例を見ても、その年の書簡から「致」をイタルと訓読しているのである。しかし、この全集からの引例なので、参考とするに止めて置こう。

また全集第一冊には『孝経啓蒙』初稿本が収められており、年譜に拠れば寛永十九年（一六四二）に書かれたものであるが、これには「致」はイタシとかイタスとかイタ読され、イタルとは訓読されていない。なお解題に拠れば、この訓点は藤樹



自身が施したものだということである。また定稿本でもイタシと訓読している。但し篠原氏本では「致」を「……。ニイタル」と訓読しているという。

中江藤樹の晩年の作と伝えられる『大学考』（『藤樹先生全集、第二冊』所収）は和文で記されているが、その中には、

……故ニ物ヲ格シテ知ニ致ルトキハ、意自ラ誠ナリ……

とある。片仮名で「ル」と送っている以上、この「致ル」は明かにイタルと訓読すべきものである。

また『大学解』（『藤樹先生全集、第二冊』所収）には「致知在格物」の訓話として、和文を以て、

……○致ハ至也。知ハ良知ナリ。孩提ノ愛ヲシリ敬ヲシリ、成人ノ四端及、意念ナキ時、真是ヲシリ真非ヲ知ル。皆良知不昧ノ端的ナリ。此良知ヲ主トシテ意念ノ己ニ克ヲ知ニ致ルト云。○格ハ正也。其不正ヲ正シテ正ニ復ルノ義ナリ。……

とあり、更に「物格而后知至」の訓話に、

……知至ハ良知呈露シテ明ナルヲ云。……

句解には、

……上文明徳ヲ天下ニ明ニスルヨリ知ニ致ルニ及デ、節々先ノ一字ヲ用ユ。……

などである。

やはり晩年の作と伝えられる『中庸解』（『藤樹先生全集、第二冊』所収）には「致中和、天地位焉、万物育焉」の訓話に

和文で、

致ハ至ナリ。至于聖人ノ至ト同意。……

と述べ、また句解には和文で、

……中和ハ聖人ノ独得ルノミニ非ズ。本来人々具足ノ物ナレバ中和ニ致ルトキハ、凡夫モ即聖人ナリ。……

と述べている。

また『中庸統解』（全集、第二冊）の「天下之達道五」の句解には和文を以て、

……一点ノ良知イマダ昧カラズトイヘドモ、習心ノ病物ニテ良知ニ致コト不能。ココニ於テヨク省察シテ習心ノ固滞ヲ克去リ、勉テ致良知則 病痛日ニ除テ心体日ニ明ナリ。……  
〈註〉致良知に送り仮名は無い。

と述べている。

中江藤樹の講義を門人が筆記した『孝経講釈聞書』（全集、第二冊）は成立の年代が分らないものであるが、この中には

……礼法ヲ以正キ処ニ墳墓ヲナシ、葬礼ヲ致シ、喪ニ居テ哀戚ノ誠敬ヲ尽シ……

と和文で記されている。或は別な箇所には、

……哭泣哀ミヲイタシ……

とある。

正保二年乙酉（一六四五）春の執筆といわれる、「答田辺子」と題する書簡（全集、第二冊）には「……一念良知に致るときは……」とあり、同三年丙戌秋といわれる「答一尾子」（同所収）には「物を格し知に至るを道を行ふと申候」、同四年丁亥春といわれる「答一尾子、二」には「良知に致れば善常に心の主たり」という言葉も見える。また、慶安元年戊子（一六四八）といわれる「送岡村子」（同所収）にも「……物を格し知に致るを……」とある。

書簡の中で「与谷川氏」（全集、第二冊）は次の如き注目すべき言葉が見える。

……格致の要は慎独にて候。格は正也。物は事也。視聽言動思の五事也。致は至也。知は良知也。視聽言動思の道にたがふ処を正して良知の本体に至り随ふを格物致知と申候。扱物をただすは致知也。知に致は格物也。……

右の内容に就いては後で検討することにした。なお、右に挙げた書簡は、いずれも和文を以て記されている。

寛永十五年戊寅（一六三八）に藤樹が編述した『捷徑医筌』（全集、第四冊）という本が有る。この本の訓点が藤樹の施したものと、他の人が施したものとは不明である。ただ同書の巻之首に訓点に従って読めば、「陰陽相と勝ツコトヲ致シ」という箇所が有り、巻之二には、「心脈短小ハ必（ズ）心虚ノ致ス所」という箇所が有る。

以上、煩を厭わずに中江藤樹に於ける「致」の訓読を挙げて見た。確実に藤樹が施したかどうか断定できない訓読も混っているが、しかし、かなりの確実性を以て、藤樹が「致」を、「イタス」「キハム」「イタル」の三通りに読み分けていたということを確認得るのである。

即ち、藤樹が「致」の字訓として「イタス」を知っていたことが明らかである以上、「イタル」という訓は、藤樹が意識的に読んだものであり、そうであるならば、そのような訓の根拠が存在することも確実であると言えよう。そこで、「致」に「イタル」の訓が認められるかどうかを先ず検討しよう。

#### 四

「致」に「イタル」の訓は認められるであろうか。

諸橋轍次博士の『大漢和辞典』（大修館書店、昭和四十三年）の「致」の項を参照すると、訓として、イタス・イタル・イタリ・ツク・カナフ・コマカ・ツマビラカ・カサナル・カサネル・オモムキ・フダ等が掲げられ、「至」に通ずという説明も有る。

すなわち、「致」にイタルの訓は認められているのである。

『大漢和辞典』の「致」の項のイタルの訓には次の如く記されている。

（二）いたる。「一切経音義、八」致、至也。到也。「周礼、春官、大卜」一曰、致夢。〔注〕至夢、言夢之所至。

ついでにイタリの訓の説明も掲げて見ることにする。

(三) いたり。極致。「礼、礼器」礼也者物之致也。「注」致之言、至也、極也。

また、「致」の熟語である「致知」については、次の如く説明されている。

「致知」チチ (一) 知識を推し極めて物事の道理に通ずること。「大学」一引用文は省略一「章句」致、推極也、知、猶識也。推極吾之知識、欲其所知無不尽也。(二) 本然の良知を完全ならしめる。「伝習録、中」惟致其良知。(三) 其の止まるべき所を知ること。其の本分を知ること。「日知録、経義、致知」致知者知止也、知止者何、為人君止於仁、(中略)、知止然後謂之知至。

台湾商務印書館刊行の『辞源』(修訂正統合編・附補編)(中華民國五十九年版)の「致」の項の説明のみを抜萃すると次の如くである。

(一) 謂推而極之也。(二) 尽也。(三) 与也。如与人書曰致書。(四) 交与之曰致。(五) 帰還之曰致。(六) 招致也。(七) 伝致也。(八) 意態也。如言雅人深致。(九) 就也。(十) 与至通。(十一) 与緻通。密也。

『大漢和辞典』の説明と大差は無い。

さて、『大漢和辞典』のイタルの用例中、『一切経音義』は手許に無く、原典を参照できなかった。『周礼』は「春官、大卜」に「掌三夢之法、一曰致夢、二曰觴夢、三曰咸夢」とあり、その注に「夢者、人精神所寤可占者、致夢、言夢之所至、夏后氏作焉、云々」とある。即ち夢の至る所を占うものである。

イタリの用例は、『礼記』の「礼器」第二十六章から引いている。全文を掲げると次の如くである。

君子曰、無節於内者、觀物弗之察矣。欲察物而不由礼、弗之得矣。故作事不以礼、弗之敬矣。出言不以礼、弗之信矣。故曰礼也者、物之致也。

文化十年（一八一三）刊の『音訓五経』は、佐藤一斎の校定に成るものであるが、「物之致也」については訓点が無い。第十七章の「徳産之致也精微」の致は音読したと考えられ、第二十二章の「其致一也」もチ、「有放而不致也」はキハム、第二十四章の「非作而致其情也」もキハム、第二十七章の「因其財物而致其義焉爾」はイタス、第三十四章の「則致遠物也」もイタス、と読んでいる。（以上の章数は、台湾開明書店刊行の『断句十三経经文』〈民国五十七年〉の章数に拠る）従って「物之致也」をイタリと読むことには、それほどの根拠が有ると思われず、これをイタリの用例とするのは必ずしも妥当とは言えないのである。

第十七章の「徳産之致也精微」の下に「致直二反」と有るので、この「致」はチと音読したのかと推測するが、「物之致也」の場合も送り仮名が無いので、「物ノ致ナリ」と読んだ可能性が高い。

富山房の『漢文大系・第十七巻・礼記』（昭和五十一年）は、鄭註の『礼記』を収録しているが、その訓点は和刻本をもとに服部宇之吉博士が施したもののようで、例えば「其致一也」はムネ、「非作而致其情也」はイタス、と読んでおり、佐藤一斎の校定した『礼記』の訓読とは異同が有る。そして、「物之致也」は、鄭註が有るにも拘らず、訓点を施していないのである。

ただ、「物之致也」の「致」の場合、イタスと読むことだけは適当でない。「致ナリ」も「致リナリ」も「致ミナリ」も可能であるが「致ス（コト）ナリ」という読み方だけは考えられないのである。

以上、「致」をイタスとかイタルとか読むことが認められているということを再確認したものである。

## 五

「藤樹先生年譜」（全集、第五冊）に拠れば、中江藤樹が『陽明全集』（一本に『陽明全書』）を得たのは、三十七歳の正

保元年甲申（一六四四）のこととする。

熊沢蕃山（元禄四年歿、七十三歳）の『集義外書』巻之六の第六章には次の如く記されている。（和文）

……二十二歳の時、初めて四書の文字読を習ぬ。集註に仍て四書を学びき。廿四の七月高島に行て、中江氏に逢て、うたがはしき事をとふ。帰て又九月に高島に行て、来年の四月まで居て、孝経大学中庸を学びき。それより後は父たる者仕へを求めんがために江戸に行ければ、東江州の人遠き城屋敷に母并に妹どものみありければ、京都にも西江州にも行ことかなはず。家きはめて貧にて、独学する事五年なりき。しれる人、母弟妹のあるをしり、饑饉の餓死に入んことをあはれみて、つかへを求めしむ。其比中江氏王子の書を見て良知の旨をよろこび、予にも亦さとされき。これによりて大に心法の力を得たり。（中略）中江氏は生付て氣質に君子の風あり。徳業を備へたる所ある人なりき。学は未熟にて、異学の（弊）つひえもありき。五年命のびたらましかば、学も至所に至べき所ありしなり。……

右の記事に拠れば、蕃山が二十四歳の年は寛永二十年癸未（一六四三）で、この年の七月に藤樹に会い、九月に再び藤樹の許を訪れて翌正保元年甲申四月まで滞在したことになる。蕃山は以後五年間、独学で儒学を研究しているが、この頃、藤樹は陽明学を信奉していたというのである。これは年譜の記事とも略々一致する。「学は未熟にて」というのは、陽明学に未熟というよりも、儒学全般を指していると思われる。「異学の弊」は陽明学を指していると考えられる。蕃山の師藤樹に対する此の如き批判（他の箇所にも有るが）については、いずれ論ずることにして、ここでは此れ以上触れないことにする。

さて、年譜にある『陽明全集』（一本に『陽明全書』）が何を指しているか分らない。現在の段階では出版目録も寛文年間から以後のものしか見ることができず、中国大陸からの舶載書目も正徳年間以降のものしか調べることができないので、『陽明全集』の内容を的確に知ることはできない。しかし、現行の『王陽明全集』や『王文成公全書』『王陽明全書』などと大差は無いと考えられる。即ち、『伝習録』『文集』『詩集』『書牘』『奏議』『年譜』などを含むものと考えられ、藤

樹はそれ等に目を通していたと推測されるのである。

## 六

王陽明の「致良知」は、常識的には「良知ヲ致ス」であるが、藤樹はこれを「良知ニ致ル」と訓読したことが知られている。そこで、王陽明の「致良知」を「良知ニ致ル」と解することが誤りであるか、どうか陽明の言葉や文章に就いて検討して見たい。

王陽明の「致知」の「知」とは何であろうか。『伝習録』には次の如く記されている。(原文は漢文)

(王陽明の言葉として) 又曰ク、知ハ是レ心ノ本体ナリ。心自然ニ知ルコトヲ会ス。父ヲ見テハ自然ニ孝ヲ知り、兄ヲ見テハ自然ニ弟ヲ知り、孺子ノ井ニ入ルヲ見テハ、自然ニ惻隱ヲ知ル。此レ便チ是レ良知ニシテ、外ニ求ムルコトヲ假ラズ。(中略) 然ルニ常人ニ在リテハ私意ノ障礙無キコト能ハズ。所以ニ須ラク致知格物ノ功ヲ用ヒテ私ニ勝チテ理ニ復ルベシ。即チ心ノ良知更ニ障礙無ク、以テ充塞流行スルコトヲ得。便チ是レ其ノ知ヲ致スナリ。知致レバ則チ意識ナリト。(巻上、第八章)

いま右の訓読は富山房の『漢文大系、第十六卷』所収の『伝習録』(底本は三輪執斎刻本)に拠ったが、末尾の部分は「是致其知。知致則意識。」となっている。

佐藤一斎の『伝習録欄外書』(松山堂、明治四十五年刊)には、此の章に註して、

……彭定求曰ク、程子曰ク、知ハ吾ノ固ヨリ有スルトコロ、然レドモ致サザレバ則チ之ヲ得ルコト能ハズ、ト。先生ノ致知ノ説ハ、此レニ本ツク。(原文は漢文)

と彭定求の説を引用している(彭定求は程子の説を引いている)が、この見解に従えば、「致其知」は「其ノ知ヲ致ス」と

なる。ただ、「知致則意誠」については、知ヲ致スとは読めない。知致いた(至)レバか、知致きま(極)マレバか、どちらかの読み方しかないと考えられる。

また、王陽明は次の如く述べている。

……吾ガ心ノ良知ハ即チ所謂いはゆる天理ナリ。吾ガ心ノ良知ノ天理ヲ事事物物ニ致セバ、則チ事事物物皆其ノ理ヲ得。吾ガ心ノ良知ヲ致ス者ハ致知ナリ。事事物物皆其ノ理ヲ得ル者ハ格物ナリ。是レ心ト理トヲ合セテト為ス者ナリ。……(巻中、第六章)

右について吉村秋陽の『王学提綱』(文久六年刊)の上巻二十三丁裏に、次の如く註している。(原文は漢文)

致ハ拡充到底ノ謂いひ、王子ノ格致ヲ説クハ、多ク動処ニ在リ。蓋シ人ノ喻たとり易キヲ以テナリ。然レドモ是レニ因ツテ往往其ノ義ヲ誤認スル者有リ。知ハ主宰ヲ言ヘルナリ、物ハ流行ヲ言ヘルナリ、ト知ラズ。……致知ハ、タダ是レ流行中ノ常、個ノ主宰ヲ立ツルノミ。主宰立チテ流行其ノ則に順フ。……

こういう「致」の解釈は一おう常識的ではあるが、王陽明が「大学問」に述べていることは少しく異なるのである。

『漢文大系、第十六』所収の「大学問」から、同大系本の訓点に従って抄録して見よう。すなわち、次の如き言葉が有る。  
……故ニ其ノ意ヲ誠ニセント欲スル者ハ必ズ知ヲ致スニ在リ。致ハ至いたナリ。喪ハ哀ヲ致スト云フ致ノ如シ。易ニ言ハク、至いたヲ知リテ之ニ至ルト。至いたヲ知ル者ハ知ナリ。之ニ至ル者ハ致ナリ。知ヲ致スト云フ者ハ、後儒ノ所謂其ノ知識ヲ充広スルノ謂いひヒノ若キニ非ザルナリ。吾ガ心ノ良知ヲ致スノミ。……

右の文中に引く易経の言葉は、「乾」の文言の九三の「子曰ク、君子徳ニ進ミ業ヲ脩ム。忠信ハ徳ニ進ム所以ナリ。辞ヲ脩メテ其ノ誠ヲ立ツルハ、業ニ居ル所以ナリ。至ルヲ知リテ之ニ至リ、与ニ幾スベキナリ。云々」(漢文大系の訓読に拠る。底本は伊藤東涯の周易経翼通解)を引いているのであろう。幾は期に通じ、「時機が来たのを知れば進んで事に当り、



共に時機を期するに足る」という意味に解釈される箇所である。

右に引用した「大学問」にいう「致ハ至ナリ」（致者至也）以下は、どう解釈すべきであろうか。致は至であるということは、本稿「四」にも述べている如く、致は至に通ずる例が有り、且つ中国語の発音では致と至が同じであること等から導き出された言葉ではないかと思う。

そして「喪ハ哀ヲ致ス」（喪致乎哀）の「致」の如き致であり至であると、具体的に例を挙げていたのである。この「喪ハ哀ヲ致ス」という言葉は、内容的に關聯するものが『論語』や『礼記』に見えているが、直接的には『論語』子張第十九の第十四章（子游曰ク、喪ハ哀ヲ致シテ止ム）に拠っていると考えられる。この第十四章の朱註を次に引用して置こう。

致ハ其ノ哀ヲ極メテ文飾ヲ尚バザルナリ。楊氏ガ曰ク、喪ハ其ノ易メンヨリハ、寧ロ戚メ。礼足ラズシテ哀余リ有ルニ若カズ、ト。愚按ズルニ、而止ノ二字マタ微シク高遠ニ過ギテ、簡略細微ノ弊有り。學者之ヲ詳カニセヨ。

右の文中の楊氏とは楊中立のことで、愚とは朱熹自身のことである。この楊氏の言葉は、『論語』八佾第三の第四章（林放、礼ノ本ヲ問フ。子ノ曰ク、大ナル哉問フコト。礼ハ其ノ奢ランヨリハ寧ロ儉セヨ。喪ハ其ノ易メンヨリハ寧ロ戚メ。）の朱註に引く范淳夫の言葉と極めて似ている。一部を引くと、

范氏ノ曰ク、夫レ祭ハ其ノ敬足ラズシテ礼余リ有ルヨリハ、礼足ラズシテ敬余リ有ルニ若カザルナリ。喪ハ其ノ哀足ラズシテ礼余リ有ルヨリハ、礼足ラズシテ哀余リ有ルニ若カザルナリ。礼之ヲ奢ニ失シ、喪之ヲ易ムルニ失スルハ、皆本ニ反ルコト能ハズシテ其ノ末ニ随フ故ナリ。……

となっている。即ち、楊氏の言葉は、八佾第三の第四章の孔子の言葉と、朱註に引く范氏の言葉を併せたものになっている。

ともあれ子游の「喪ハ哀ヲ致シテ止ム」の裏には、孔子の「喪ハ其ノ易メンヨリハ寧ロ戚メ」という言葉が有ることは確

かである。「人の死には葬儀をきちんとするよりも、むしろ心から悲しむことだ。」という意味であるが、これが「喪ハ哀ヲ致シテ止ム」という子游の言葉となり、王陽明の「大学問」の「喪ハ哀ヲ致ス」という言葉となっている。また朱註に引く范淳夫の言葉から、もしくは楊中立の言葉から、「喪ハ哀ヲ致ス」とは、「礼足ラズシテ哀余リ有ル」状態になることを意味していると考えられる。

先述の如く、易経の「至ヲ知リテ之ニ至ル」という言葉の「至」は、時機の到来することであり、「之ニ至ル」は時機を掴むことである。王陽明は「至ヲ知ル」ことを「知」とし、「之ニ至ル」ことを「致」とした。そして、「知ヲ致ス」とは、「知識ヲ充広スルノ謂ヒノ若キニ非ザルナリ。」としているのである。すなわち吉村秋陽の『王学提綱』にある「致ハ拡充到底ノ謂」というような考え方を王陽明は否定しているのである。何故なら、「大学問」の別な箇所述べている如く、「吾ガ心ノ良知、自カラ知ラザル者有ルコト無シ。其ノ善ヤ惟ク吾ガ心ノ良知自カラ之ヲ知ル。其ノ不善ヤ亦惟ク吾ガ心ノ良知自カラ之ヲ知ル。」というように、良知の曇り無き自然の働きは、特にそれを働かせる必要の無いものだからなのである。この点に着眼した中江藤樹が、「致」を「至ル」と解釈し、訓読したことは、謂わば当然の成り行きであったと考えられるのである。

つまり「致」は王陽明にあつては、「イタス」ことであると同時に「イタル」ことであり、働かせることであると同時に働くことであり、到達させることであると同時に到達することであった。単に知識を充広するという側面だけで見るべきものではなかったのである。

中江藤樹ほどの学者が「致」の訓を誤ることはない。事実、藤樹の著述の中に「致」をイタスとかキハムとか読んだ例が有することは即ち本稿「三」に於て述べた通りである。

同じく本稿「三」に引用した「与谷川氏」の書簡を再び採り上げるが、いま、現代語訳にして掲げて見よう。

……格物致知の要点は、独り、慎しむということ。格とは正すということ。物とは事がらです。視る・聴く・言う・動く・思う、の五つの事です。致は至るといふこと。知は良知です。視る・聴く・言う・動く・思う、という事で道を外れている点があれば正して、良知の本体に本体に到達し随うようにするのを、格物致知といふのです。そして、物を格すのは致知なのです。知に致るのは格物なのです。……

右の引用文を見ても分るように、王陽明の言葉にもとづいて、致知は物を正すということ、知に致るといふこと、両様の解釈をしているのである。

本稿「二」に引用した三宅石庵の「書藤樹先生書簡雜著端」に石庵が述べているように、知ニ致ルという訓によって、藤樹が王陽明の学術を理解していないと評する者が有るかも知れないが、実は藤樹は理解していたし、藤樹が藤樹たる所以もここに在るといふべきであらう。

以上の藤樹の「致」の見解に立って「喪致乎哀」を見直すと、「喪ニハ哀ニ致ル」と訓読でき、「喪には哀しみの極みに到達する」という意味に解釈され、「致ス」といふ訓読の内容と必ずしも矛盾するものではないのである。これは他の致に就いても言えよう。

## 七

以上、中江藤樹が「致良知」を「良知ニ致ル」と解説したことに就いて、この解説が誤解ではなく、王陽明の言葉の中に、この解説を可能にする理由が有ったことと、その理由にもとづいて藤樹が意識的に「致ル」と読んだこと、そして「致ル」といふ訓も認められることに就いて述べた次第である。論述の粗漏不備も有るかと思うが、先輩諸賢の御教示を得られれば幸いである。

(昭和五十二年十一月下澣識)